地域環境を活かした高齢化集落活性化策の検討
～過疎農山漁村と中心市街地との協働による地域づくり～

指導教員：金沢星稜大学人間科学部 教授　池田幸應，金沢大学人間社会研究域法学系 特任助教　田中純一
参加学生：＜金沢星稜大学 池田ゼミナール＞　荒山昴士・池上巨倫・宇波圭祐・岡本　聡・金谷教史
河﨑健一郎・久保拓郎・瀬戸ちぐさ・高松雄平・松崎　睦
＜金沢大学 田中ゼミナール＞　赤坂美幸・井口克郎・猪野　舞・黒木志保・齋木章太
鈴木方巳・高瀬由佑子・前川裕美・眞杉篤司・米良亘平

１．調査研究成果要約

これまで穴水町に継続的に関わっている両ゼミナールが，過疎農山漁村である兜地区および中心市街地の穴水町商店街の 2 つの地域の視点に立ち，学生間・地域間の相互交流活動を第一としながら，地域環境に関する資料調査，現地視察調査，地域住民へのヒアリング調査，そして両地域住民参加型ワークショップの開催等を実施し，当該地域における高齢化集落活性化策としての『体験型地域間交流促進策』の協働提案を行った。

２．調査研究の目的

2.1　穴水町の概要

穴水町は，能登半島中央部に位置し奥能登の玄関口であり，自然・歴史・文化が豊かでグリーン・ブルーツーリズム活動に適した地域である。しかし，その人口は 9,742 人（平成 21 年 12 月 1 日現在）と 1 万人を割り，過疎高齢化の進行により限界集落がほぼ町の人口の 1 割を占めるに至っており，高齢化集落対策は急務な課題となっている。今回の調査対象地域である兜地区に関しても例外ではなく，過疎高齢化がより進行している。ただし，この地域においても豊富な自然環境に加え，「銭塚」，「甲小寺遺跡」や「加夫刀曳き舟まつり」等の歴史・文化面での地域資源を保有している。

一方，地域にとって重要な役割を果たすべき中心市街地についても，穴水町商店街では，過疎化や近郊型大型店等の影響により客離れが進行し，売り上げ減少や投資の縮小化等に繋がっている。現在，平成 19 年 3 月 25 日発生の能登半島地震からの復興活動も 3 年目を迎え，穴水町復興対策室は勿論，地域住民が多く関わる「穴水町まちなか再生協議会」（3 部会：活力再生部会・街並み再生部会・女性部会）を中心に活動を進め，商店街復興・再生の地域資源として「カフェ・ローエル」や真名井川―穴水湾を結ぶ全長約 1 キロの周遊コースを活かしたカヌー事業等が実施されている。

2.2　当該地域における連携ゼミナールの活動

2.2.1　金沢星稜大学「池田ゼミナール」について

池田ゼミナールは，「学生生活と地域社会との Interaction」をテーマに，野外教育の視点から地域現場での積極的活動を行っている。当該地域においても，継続的に「こどもエコロジーキャンプ」や「ワーキングホリデー」等に参加し，農山漁村体験活動を積極的に実施しており，本地域課題研究ゼミナール支援事業に関しても，『穴水町ふるさと体験村「四季の丘」周辺地域を中心とした地域環境の利活用および交流活動推進策の検討』（平成 17 年度），『地域環境を活かした商店街活性化策の検討』（平成 19 年度）を課題とし，住民との交流活動を通して地域振興策の提案を行ってきている。

2.2.2　金沢大学「田中ゼミナール」について

田中ゼミナールは，現場主義を重視し，学生自身が自ら設定した課題を理解するために直接現場に足

を運び，課題解決に向けた情報収集および地域が保有している人的・物的資源の発見に力を注いでいる。能登半島地震を契機に奥能登地域に関心を持った多くの学生が，能登半島地域の復興・再生に取り組んでおり，これまでに学生が復興公営住宅に居住する独居高齢者の見守り・寄り添い活動を自主的に組織化しており，今後のより積極的な活動推進を目指している。

2.2.3　両ゼミナールの連携活動の開始

上記のように，継続的に両ゼミナールが共に当該地域における能登半島地震からの復興支援活動に大きく関わっては来たが，残念ながらゼミナール相互の連携はされておらず，平成 21 年 3 月 21・22 日に開催された「能登半島地震 2 周年の集い」の場における意見交換を起点とし，その後の当該地域に関する両ゼミナールの方向性の類似もあり，今回の大学コンソーシアム石川における本事業として，両ゼミナール学生が交流し，協働で当該地域の課題解決策に取り組むに至った。

2.2.4　両ゼミナール協働による調査研究の目的

本研究では，地域からの提案“高齢化集落対策”に関して，過疎農山漁村地域における課題の明確化に加え，中心市街地からの視点も加えた総合的な活性化策として，学生たちが各ゼミナールの特性を活かし，ゼミナール間・地域住民との交流連携活動を通して相互理解を深めながら，地域環境調査を実施し，検討会やフォーラム等により，大学生の視点から継続的な提案を行い，地域振興に寄与することを目的とする。

３．調査研究の内容

3.1　調査の方法

今回の研究を進めるのに際し，まず両ゼミナール学生相互の交流は勿論，出来るだけ多くの地域住民や各種団体・行政機関の方々との交流を持ちながら，連携して取り組む姿勢を重要視した。そして，過疎農山漁村地域として以前から交流のある兜地区を中心に，中心市街地として穴水町商店街を中心に調査研究を行った（主として池田ゼミナール：過疎農山漁村地域，田中ゼミナール:中心市街地)。調査活動としては，主に以下の 4 つについて実施し，自然・歴史・文化や産業，農林漁業等の穴水町の地域資源を活かした農山漁村と中心市街地の協働による活性化策の検討を試みた。なお，これまでの当該地域における調査研究活動の資料も参考にした。

写真 1. 両ゼミナールの活動検討会

3.1.1　地域環境調査

・両ゼミナールが実施した当該地域に関するこれまでの既存調査結果等を再確認した。
・穴水町全体の地域資源（自然・歴史・文化，そして人材等）を資料調査および現地視察，ヒアリング調査により把握した。

3.1.2　過疎農山漁村における高齢化集落の実態調査および地域住民との交流・検討会の開催

・兜地区において，ヒアリング調査を実施し，課題を明確化した。
・同町の中心市街地との連携の可能性について追加調査を実施した。

3.1.3　中心市街地における商店街の実態調査および地域住民との交流・検討会の開催

・駅前商店街地区において，ヒアリング調査を実施し，課題を明確化した。
・同町の過疎農山漁村地域との連携の可能性について追加調査を実施した。

3.1.4　地域課題研究ワークショップの開催

・両ゼミナールの学生や地域住民参加型の地域課題研究ワークショップとして，『過疎農山漁村と中心市街地との協働による地域づくり』をテーマに，過疎農山漁村地域と中心市街地の 2 つを会場に

して，地域環境を活かした高齢化集落活性化策について検討を行った。(平成 21 年 12 月 12 日，「キャッスル真名井」にて“商店街フォーラム”を実施した。また，平成 22 年 3 月上旬“かぶとフォーラム”を「旧穴水町立兜小学校」にて開催する予定である。)

3.2　具体的活動スケジュール

両ゼミナールが連携しながら，以下ように調査研究を実施した。

表 1. 両ゼミナールの具体的活動スケジュール　（下記以外にも、各大学においてゼミナール毎に資料作成・整理等を実施した）

日時	当該地域におけるゼミナールの主な活動	主体ゼミ
6／11	両ゼミナールの連携方法に関する打ち合わせ会議（金沢星稜大）	両ゼミ
6／25	過疎農山漁村（兜地区を中心に）への視察および当該地域行政側との調整会議（穴水町役場）	両ゼミ
7／19	両ゼミナールの現地合同視察（四季の丘周辺，「長谷部祭」），打合せ会議（キャッスル真名井），	両ゼミ
8／10	中心市街地調査（カヌー調査等）および地域住民意見交換会（穴水町商工会）	田中ゼミ
8／22	地域伝統文化交流体験活動（「加夫刀曳き舟祭り」）およびヒアリング調査	両ゼミ
10／11	中心市街地調査（カヌー調査等）および地域住民ヒアリング調査	田中ゼミ
10／25	中心市街地住民ヒアリング調査（穴水町商店街）	田中ゼミ
11／15	中心市街地住民ヒアリング調査（江尻屋）	田中ゼミ
11／22	地域行事交流体験活動（「第 54 回穴水町駅伝競走大会」）およびヒアリング調査	池田ゼミ
12／12	地域課題研究ワークショップⅠ：穴水町“商店街フォーラム”の開催（キャッスル真名井）	両ゼミ
12／13	両ゼミナールの現地合同検討会議（キャッスル真名井）	両ゼミ
12／ 2	穴水商店街関係者ヒアリング調査	田中ゼミ
12／28	兜地区関係者ヒアリング調査	池田ゼミ
1／ 8	地域課題研究ワークショップⅡについての打ち合わせ会議および研究報告書作成についての確認	両ゼミ
3 月中	地域課題研究ワークショップⅡ：穴水町“かぶとフォーラム”の開催予定（旧兜小学校：金沢星稜大学「地域連携・交流センターかぶと」）	両ゼミ

４．調査研究の成果

4.1　地域環境調査の結果

上記の具体的活動スケジュールの通り，複数回現地を訪れ現地視察，資料収集などの地域環境調査を実施した。兜地区においては自然，歴史，文化などの地域資源が豊富で，加えてふるさと体験村「四季の丘」や旧穴水町立兜小学校などの宿泊型体験施設や体験活動拠点があることから，農林漁業体験活動に適した地域であると言える。「四季の丘」周辺には，「まいもん体験農園」，「ふれあい牧場」が隣接しており，「子どもエコロジーキャンプ」等の会場として穴水町の野外体験活動の中心地として機能している。

写真 2. 旧兜小学校視察風景

また，穴水町商店街においても同様に，地域環境調査を実施し，商店街を横断する真名井川を利活用したカヌー活動が実施されており，そのノウハウを持った人材が多いことも明らかとなった。

4.2　過疎農山漁村における高齢化集落の実態調査および地域住民との交流活動

8 月 22 日の「加夫刀(かぶと)曳き舟祭り」や 11 月 22 日の「第 54 回穴水町駅伝競走大会」への学生の地域伝統文化への参加交流および高齢化集落活性化に関するヒアリング調査を含む地域住民との交流・検討会等により，“若い人がいない”，“高齢者の独り暮らしが増えている”，“街へ買い物に行くのが大変”などの問題点を直接聞くことが出来た。また，“若い人が来てくれただけでも兜の活性化につながる”，“高齢化で担ぎ手が減って困っていたので助かる”など，私たちのような町外からの学生であっても，地域にとって必要とされていることが分かった。そして何よりも“ありがとね”，“近くに来た時にいつでも寄ってって”などと，『能登は優しや土までも』というように心の温かい人が多くいることが分かった。

写真 3. 加夫刀曳き舟祭りへの参加

4.3　中心市街地における穴水町商店街の実態調査および地域住民との交流活動

写真４．真名井川でのカヌー調査

現地における視察調査や震災直後時から継続している足湯ボランティア活動等を通じて，穴水町商店街の現状についてのヒアリング調査を行った。その結果,「若い人が少ない」,「営業しているかどうか分かり難い店舗が多い」,「統一感がなく，どこから商店街なのかが分かり難い」,「飲食店が少ない」など，多くの課題が存在していることが明らかとなった。しかし「商店街には，ローエル，運河などの歴史的な繋がりがある」,「かき祭りや長谷部祭りには，町外から多くの人々が訪れる」などの商店街の活性化に関わる複数の重要なキーワードを得ることも出来た。カヌーを活用したフィールド調査では，“カヌーに乗っていると，地域の人が気軽に声をかけてくれる”“カヌーの知識や技術を持った人が商店街に多い”という意見の傍ら，“有効資源が活用されていない”“かつて活用されていた水路の利活用がなされていない”などの意見もあり，中心市街地活性化への地域資源のより一層の利活用の必要性があると明らかとなった。

4.4　協働による課題への取り組みの具体例：「地域課題研究ワークショップ」の開催

写真５．ワークショップの様子

両ゼミナールの主催により,12 月 12 日に穴水町商店街関係者および兜地区住民を交えて「地域課題研究ワークショップⅠ」(“商店街フォーラム”）を穴水町キャッスル真名井にて開催した。ワークショップでは，これまで実施した田中ゼミナール学生の調査研究発表をベースに,「2020 年の穴水町商店街のバックキャスティング」を題材に，2020 年の穴水町商店街像に関する意見を出し合い，実現に向けた課題，課題克服に向けた具体的取り組みについてのディスカッションを行った。また，兜地区での池田ゼミナール学生の取り組みを商店街の方々に向けて発表し，過疎農山漁村地域と中心市街地の二つの地区の住民の相互理解を促進することが出来た。

そして，今後平成 22 年の 3 月上旬には，旧穴水町立兜小学校において「地域課題研究ワークショップⅡ」(“かぶとフォーラム”）を開催し，両地区住民の相互理解への積極的促進を行う予定である。

4.5　調査研究により明確となった課題

はじめに前述したように，穴水町は人口が１万人を割り，過疎高齢化の進行により限界集落が町の人口の１割を占めるに至っている。今回の調査研究により，このような状況下においても過疎農山漁村と中心市街地が相互に穴水町の活性化にどのような働きかけをしているのかについて，両住民が十分に把握しておらず，まだお互いが協働して地域づくりに臨む体制が出来ていないことが分かった。

５．調査研究に基づく提言

5.1　過疎農山漁村と中心市街地との協働による活性化策

本調査研究により，過疎農山漁村と中心市街地との協働による地域環境を活かした高齢化集落活性化策として，以下の具体的３方策による『体験型地域間交流促進策』を提案する。

＜方策１＞　農山漁村における体験活動拠点と街中カヌー体験との連携

当該地域には，自然・歴史・文化，また「四季の丘」やまいもん体験農園，そして農業，漁業等の専業家も多く，様々な体験活動に適した地域であると言える。実際に，これまで「こどもエコロジーキャンプ」等も継続実施されており，昨年度は，文部科学省採択事業「農山漁村体験学習」として，金沢市内の中学生が過疎農山漁村地域での農林漁業体験や農村漁村民泊体験等を行った。来年度には，旧兜小学校に開設された「地域連携・交流センターかぶと」を拠点とし，地域の方々や県内の子どもたちを対象とした『かぶとふるさと体験塾』（仮称）を実施し，学生と地域住民や子どもたちとの交流活動を実

施する予定である。また，当該地域は海に隣接しており，現行の商店街関係者による真名井川カヌー体験を海でのフィールド活動との連動・発展させることで，商店街との交流促進に繋がる。

また，当該地域への交流人口増加を目的としたコミュニティづくりとして，地元生産者を講師とした体験活動を実施し，農産物，特産物について知ってもらう機会を提供したり，商店街関係者によるカヌー体験教室等を拡大して行うことで，過疎農山漁村と中心市街地との地域間交流促進に繋がる。

＜方策２＞　農家と商店街の連携による地域内経済循環の仕組みづくり

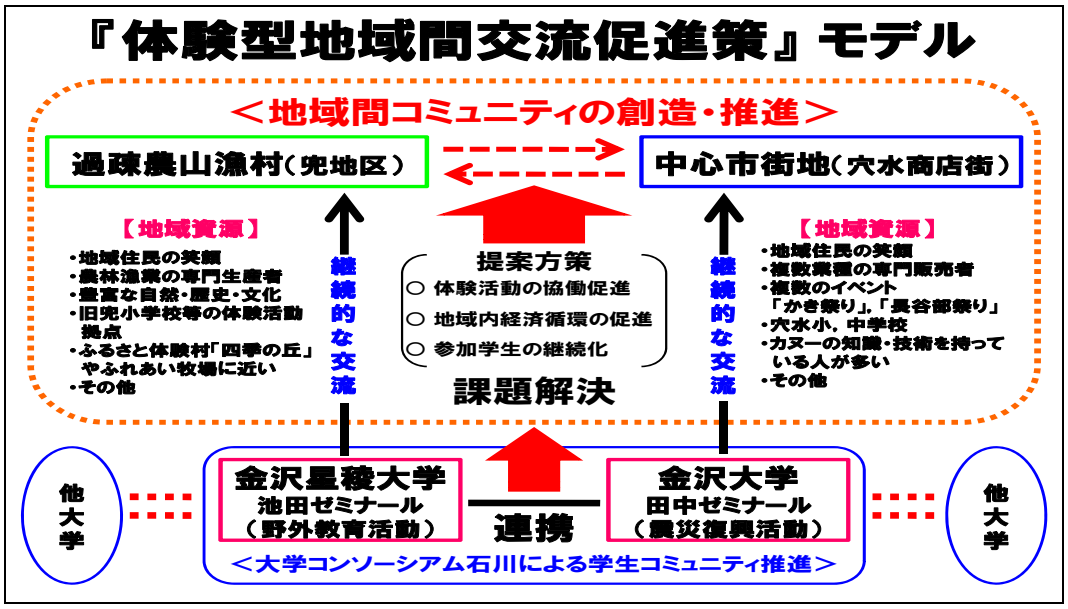
現在，多くの農家は，生産物を主として大規模消費ルートへの出荷に偏っており，穴水町商店街との販売ルートは，殆ど見られないのが現状である。そこで，農山漁村での生産物の新たな販売拠点として，商店街への直結ルートを設け地域内連携を促進することによって，生産者と消費者との季節に応じた即時的ニーズに対応させ，商店街エリアでの生産者と商店街住民協働ショップ“チャレンジショップ”等により，農山漁村地域と中心市街地の両方にとっての魅力創出に繋がり，地域経済活性化策となるものと考えられる。また，穴水町商店街には飲食店などが極端に少ないことから，毎日の生活を支える中心となる消費財が食料品であり，この点を補充するシステムにも繋げることができる。

さらに，川を中心とした街づくりを展開し，町外からの観光客の滞留時間を向上するためには，カヌー体験だけでなく，食事ができる場や特産物が購入できる店舗ゾーンの存在が望ましい。また，上述の事業展開は，商店街関係者に加え，農山漁村地域生産者などが参画する形で展開されることが望ましい。

＜方策３＞　学生の現地活動の推進とそのための高等教育機関相互連携による継続的取り組み

両ゼミナールは，これまでも継続的に当該地域において活動を行ってきたが，過疎高齢化といった課題を抱える当該地域の活性化に対して，私たち学生の立場からすべて解決することは困難である。しかし，継続的に地域と交流を持ち続けることで，当該地域への活性化に一歩一歩繋がっていることは確信できた。すべての地域は様々な課題を抱えており，それは多方面にわたっている。当該地域においても同様であり，農山漁村での過疎高齢化だけではなく震災復興等，中心市街地においても多くの課題があり，１ゼミナールの取り組みのみでは，その専門性から考えても限界がある。しかしながら，今回のように異なる専門分野のゼミナールが連携することで，各専門分野の立場から，それぞれの視点で課題に取り組むことで地域の具体的活性化に更なる発展的効果が期待できる。また，高等教育機関が地域と地域を繋ぐ架け橋になることで地域間の交流促進にも繋がる。

図１．過疎農山漁村と中心市街地との協働による地域環境を活かした高齢化集落活性化策の提案モデル



６．連携して取り組んだ地域住民の方からの声

今回の調査研究において，穴水町の行政機関や地域団体をはじめ，多くの地域住民の方々とも交流し，協働して実施することが出来た。それらの地域の方々からの声の一部を以下に紹介する。

＜兜青年団団長　高尾智之さん＞〈写真右下〉

写真６．農山漁村の地域住民

“学生の皆さんに，昨年度より加夫刀曳き舟祭り，それに加えて今年度，駅伝大会にも参加して頂き，兜地区に新しい流れができている。とても新鮮な気持ちで兜にとっても，すごい活性化になっているように思います。今後，学生の皆さんとの取り組みが，兜地区だけではなく，穴水，奥能登全体の活性化に繋がれば良いと思います。”

＜穴水まちなか協議会会長　谷内和雄さん＞〈写真右下〉

写真７．中心市街地の地域住民

“震災によって，意気消沈している中で，学生さんのような若い人たちが，来てくれることはとても嬉しい。現在，日本全国で，シャッター通りが増え，買い物客は大型スーパーへ流れてしまっているのが現状。街づくりというのは決まった形がないので，学生さんがこういったものが面白いのではないかと話し合う中で，何か手掛かりを見つけたい。その為にも学生さんたちに，少しでも協力して頂けたら有難い。”

７．調査研究の自己評価

今回，地域課題研究ゼミナール支援事業の取り組みに際し，現在，全国各地で問題となっている「過疎地域の高齢化」の課題について取り組むことができ，地域住民に向けたフォーラムの開催や課題に対しての提案を行えたことは，私たち学生にとって大きな経験となった。大きな提案はできなかったが，当該地域での交流活動や調査を通して“若い人が来てくれることが何よりも嬉しい。”との声が多く聞かれ，やはり当該地域への継続的な活動の取り組みが何よりも大切であると感じた。また，異なる大学，研究分野で活動する池田，田中両ゼミナール学生が連携し，取り組んだ本試みは，非常にチャレンジングな取り組みであった。郊外の兜地区に入り込み地域活性化について住民と共に考えながら歩む池田ゼミナールと，商店街を中心に調査研究を進める田中ゼミナールにとって，兜地区と穴水町商店街との連携は，兜地区の地域活性においても商店街の復興・再生においても win-win の関係を構築できるものと考えられる。本年度は，提言レベルに留まり具体的な連携関係の構築・推進までには至らなかったが，両地域の連携構築が地域活性化をもたらす意義については，十分理解することができたものと考えられる。この地域課題研究ゼミナール支援事業を契機とした池田・田中ゼミナールの連携が媒介となり，同じ町内にありながら具体的な連携がなかった地域間の連携へと今後発展することになるよう，来年度以降も継続的に地域住民と議論を重ねていく必要性を強く感じている。

・謝辞

本地域課題研究ゼミナール支援事業の実施に際して，穴水町，特に兜地区および穴水町商店街の方々のご協力・ご助言により本研究を遂行することが出来ました。この場をお借りして深く感謝の意を表させて頂きます。今後も継続的に活動を進めて行きます。　〔池田・田中ゼミナール学生 一同〕

・参考資料および文献

１）穴水町役場，『図解 穴水町の歴史』，2004

２）おおぞら農業組合，「冬の農業・漁業体験 in 穴水ワーキングホリデー実施報告書」，2005

３）小川雅人・他，『現代の商店街活性化戦略』，創風社，2004

４）能登のくに刊行会，『能登のくに - 半島の風土と歴史 - 』，北國新聞社，2003

５）のとねっと（http://www.notohantou.net/）　その他